

# 登録記念物の登録

## 《登録記念物（名勝地関係）の新登録》 4件

### 1 明神山（送迎山）【奈良県北葛城郡王寺町】

明神山（標高273.6m）は、大阪府と奈良県の府県境、奈良盆地の西を南北に縦走する生駒・金剛山系に属し、大和川が山系を分かつ金剛山地の北端に位置する。近世の畠田村領に当たるこの地域は、役行者が法華経28品を埋納した経塚を巡拝する葛城修験の第28番経塚として明神山や亀の瀬が比定されており、古くからの信仰地として知られ、かつて送迎山と呼ばれて、水神社が祀られてきた。その名には諸説あるが、聖徳太子が斑鳩と河内の往来の折に、送り迎えの使者がここに落ち合い、それが昼飯時であったことから「送迎」と書いて「ひるめ」と読むようになったとも考えられており、その道の名も送迎道と呼ばれて来た。江戸時代のおかげ参りに伴って、文政13年（1830）にわずか1年余りの間、山頂に祀られた送迎太神宮を描いた『和州送迎太神宮之圖』には、信仰地の様子が窺われ、夕日に向かい難波や住吉、淡路島への眺望を求める人びとの姿も伝えている。明神山は、生駒・金剛山系の中でもひとときわ低い岳峰であるが、周囲の地勢の相対的な関係から、四方八周の広大な眺望に開け、東の奈良盆地や西の大阪平野、南北の山並みを一眸のうちに収める。古代以来の地域における歴史文化の象徴を成し、低山ながら現代にもその眺望が広く親しまれている名所として意義深い。

### 2 丸井氏庭園【鳥取県倉吉市】

丸井氏庭園は、倉吉市の中心市街地に位置する。倉吉市の市街地は、打吹山の北麓に東西に細長く伸び、東側が商家街、西側が職人街となっている。その間は料亭が多数存在した区域で、丸井氏庭園はその一角を占めている。料理屋等の組合の事務所を運営していた丸井岩次郎（1875－1944）は、大正5年（1916）に主屋と茶室を新築し、その後昭和初期に庭園を現在の形に整えた。施工は神戸の庭師 巽武之助が請け負ったと伝わる。

丸井氏庭園は南北に細長い短冊状の敷地の中に造られている。敷地の北西部に主屋、北東部に茶室「如々庵」、南側中央に離れ、南東部に土蔵が建ち、庭園の主要な部分は北側と南側の建物間に位置する。庭園の中央に園池があり、東側に築山と流れを設けている。築山からの流れは二手に分かれながら園池へつながるが、現在水は涸れ、流れや園池には石が敷き詰められている。主屋では奥座敷が庭園に面しており、奥座敷からは園池の奥に築山、その向こうに打吹山の稜線を見ることができる。

丸井氏庭園は昭和初期に整えられ、現在までその姿がよく残っている。造園文化の発展に寄与した意義深い事例である。

### 3 上林の風穴【愛媛県東温市】

上林の風穴は、松山平野の東部南側にそびえる皿ヶ嶺（標高1,271m）の北斜面の上林地区に所在し、標高960m付近に位置する。四国最高峰の石鎚山（標高1,982m）から西方に伸びる皿ヶ嶺の連峰は、南斜面が緩やかであるのに対して、平野に面する北斜面は急傾斜を成し、懸崖に数多くの滝が見られるとともに、石鎚層群に由来する安山岩の巨岩や土砂による崖錐がところどころに発達して緩斜面が形成されている。風穴は、こうした急斜面から緩斜面に移行する地帯にあり、差し渡し2mを超える巨礫を含む岩塊堆積物の内部に溜まっている空気の温度の年較差が外部と比べて小さいことによって、冬季には崖錐上部に、そして、夏季には崖錐下部から空気が吹き出す現象が生じるものと考えられる。特に夏季には、風穴の周辺に冷気が漂うとともに、崖錐の内気が外気と接触することで霧が白く発生し、鬱蒼とした林床に苔生した巨礫の折り重なる様子と相俟って、印象的な風致景観を成す。夏季に冷気が立ち籠めるこの場所は、山を南に越える往来があつて古くから地域住民には知られており、遠足地としても親しまれてきた。皿ヶ嶺の北斜面に固有の地形や地質を反映した特徴ある自然現象を生じる場所であり、近年において広く親しまれる景勝地として意義深い。

### 4 穴井戸観音【大分県豊後高田市】

穴井戸観音は、国東半島南西部の田染に所在し、田染真中と田染小崎の境に岩峰群を成す間戸ン岩の田染真中側の北西部中腹において南東に口を開いた洞穴とその入口に設けられた薬師堂などから成る名勝地である。田染は、宇佐神宮の本御荘十八箇所のひとつとして平安時代後期に成立した「田染莊」の故地として知られる。古く穴井戸観音は、本寺として安貞2年（1228）の「安貞目録（豊後国六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写）」（『長安寺文書』）にも記される間戸寺の行場の一つであつたと考えられる。洞穴は、薬師堂の背後の高さ約3m、幅約6.5mの開口部から、奥部に「濡れ観音」を祀る奥行き20m余り、最大幅13m余り、最大高さ4m余りのドーム状を成し、さらに右手斜め奥には「穴井戸」と呼ばれる長細く狭隘な隙間が緩やかに下っていて、かつては水を湛えていたと伝わる。濡れ観音にはいつも水が滴り落ちていて、六郷満山の開基とされる仁聞菩薩が峯入り修行の際に喉を潤したとも言われ、また、穴井戸は古くは港があつた権現ノ鼻に通じているともされてきた。穴井戸観音を臨む間戸地区は、台地にあつて灌漑用水の恩恵を受けにくく、古来より水の確保に苦心してきたところで、穴井戸観音は雨乞い神事などとも結び付いた信仰地として崇められてきた名所として意義深い。